

## 入選

### 支え愛

山形県 第九中学校

二年 齋藤 莉里

私は、この土地で13年間暮らしています。家族や面倒見のよい近所のおじいちゃんやおばあちゃん、近所の優しいおじさんやおばさんに囲まれて生活していることが、とても幸せです。

母は、昔からこの土地に住んでいたわけではありませんが、年が倍くらい離れた近所の人たちとよい関係を築いていることがわかり、血はつながっていませんが、お互いに支え合って生きていることを、日々の生活から感じ取れます。

私の家の裏には、一人暮らしのおばちゃんが住んでいます。家の裏といっても、80センチメートルほど高いところにあります。私の家との境目に、おばあちゃんは塀の代わりに木を植えているのです。

毎年、夏のはじめ頃になると、窓の外から「パチン、パチン」という音が聞こえてきます。それは、おばあちゃんが剪定きんていをしている音です。その音が聞こえてくると、母は一階の和室の窓から、心配そうにおばあちゃんの様子を見ては、急いで外に出ていき、

「そのままでいいからね。けがでもしたら大変でしょう。」

と声をかけます。おばあちゃんは、剪定を終え、こちらの庭に落ちた枝や葉に手を伸ばして拾おうとしていました。散らかしてしまっていて悪いと思っているおばあちゃんに、

「すっきりして、きれいになったね。」

と笑顔で話しながら、ささっと枝を拾い始めた母の姿を見て、母の優しさを感じました。

おばあちゃんの嬉しそうな顔と声、笑顔の母と私、そんな私たちを包み込むように、温かな時間が流れたように思いました。

おばあちゃんは、庭の小さな畑で作った野菜を、いつも分けてくれます。いびつな形の野菜ですが、そこにも愛情を感じます。また、にこにこしながら優しい顔で、いつも私の頭をなでてくれる温かい人です。それは、昔も今もずっと変わりません。

このように私は、小さな頃からおばあちゃんの愛情をたくさんもらってきました。伸びた枝や葉がなくなり、また元気に暮らしているおばあちゃんの姿を見られることが、母と私が一番嬉しいことなのです。

中学生になった今は、以前よりもおばあちゃんと顔を合わせることは少なくなっていました。ですが、私のことをいつも気にかけてくれていることが、母の話から伝わってきます。私も同じ気持ちであることに、心が温かくなります。

家族や親戚でもない近所の人ですが、私にとっては家族のような大切な存在です。いつも声をかけ合い、元気な様子を確認し、困ったときにはすぐにでも助け合うことができる関係があることは、とてもすてきなことです。

人の思いやりや温かさは、そんな日常のなにげないやりとりの中にあふれていることを私は感じます。